

総研大生命科学研究科 基礎生物学専攻

大 隅 良 典

総研大、生命科学研究科の専攻として基礎生物学研究所を基盤とする分子生物機構論専攻が、設立されて18年が経過した。

また、平成17年度より、現在の本専攻がより世に分かりやすいという理由から基礎生物学専攻に名称を変更した。

その間101名の卒業生116名の博士号が授与された。そして平成16年度から5年一貫制の大学院が設置された。設立に当たっては西村幹夫教授が研究科長として大きな貢献された。研究所としての大学院のあり方をめぐってかなり時間をかけて真剣な議論がなされた。"優秀な学生を一流の研究者に育てる"ということを基本的な姿勢とすることが幾度となく確認されてきた。初年度は発足時から時間がなかったこともあり、合格者がいなかったが、その後様々な努力もあって、応募者も増え定着しつつある。しかしながら、大学院生の絶対的な減少傾向、博士課程への進学者の低下など全国的な日本の基礎研究の後継者の育成問題に基礎生物学研究所も例外ではなく、全国から高い志をもつ大学院生が入学する専攻となるためには今後一層の努力が求められている。

一方、大学院教育に対する取り組みとしても、様々な点で進展も見られた。院生の支援としてRA制度が充実した。大学院生の研究の発表の場としての生命科学プロGRESSが大学院生の研究の進捗状況の発表および、複数の教員による助言の場として設置された。生命科学研究科3専攻の合同セミナーも交流の場として多いに発展している。大学院生の企画、運営を通じて大学院生同士の交流の場が広がった。総研大の全学事業にも基礎生物学専攻の学生が積極的に取り組んでいる。研究所の大学院生の問題点でもあるマスとして小さく、全国から異なるバックグラウンドをもつという特徴が生かせるような大学院生の指導体制の構築が今後ますます重要となろう。